

スペイン語発話の音声学的一大特徴について

原 誠

本稿は一九六六年九月三日小樽商科大学で行われた日本イスペイン語学会第一三回大会での「スペイン語音声の一大特徴」という発表を文章に直したものである。筆者は一九六四年一月一六日上智大学で行われた日本イスペイン語学会第一〇回大会において、「中南米のスペイン語に特徴的な諸音声現象を音素論的に解釈する場合に生ずる技術的問題点」と題する発表を行い、また一年後に同じ題名の下に東京外国語大学耕文会機関誌「耕文」13.1—22 (1965) でそれを文章に直した。その中で筆者は中南米のスペイン語に特徴的な諸音声現象を音素論的に解釈する場合に生ずる技術的問題点を説明し、さらにこの一見無意味とすら思えるような作業を行ったことの意味についても言及した。その意義とというのはあら

まし「この作業によってスペイン語の現時点における音節構造の特徴が知れるし、またひいては将来におけるその音節構造の特徴が予言できる」というようなことであった。つまりどんな言語にせよ諸方言に関する研究およびそれら方言に関する音素論的研究は必要不可欠であり、それによって現在ないしは将来の当該言語構造に論及できることがあるということである。その例として紹介したのがポルトガルの語学雑誌 *BOLETIM DE FILOLOGIA* 9.99—120 (1948) に載った Bertil Malmberg の *La Structure Syllabique de l'Espagnol* とする論文である。これのスペイン語訳はマドリーの C. S. I. C から一九六五年に出版された彼の *ESTUDIOS DE FONÉTICA HISPÁNICA* の pp. 3—28 に収められている。本

稿はまずこの論文の要旨を転記・復習することから始めたいと思う。

Mainberg はこの論文の中で「スペイン語には／…CVC…／と／…CVCVCV…／と／…より単純で、最も基本的と思われる音節構造に統一しようとする一般的傾向が潜在している。」と／…と／…を主張した。これは正に一大発見であり、筆者もこの論文を高く評価することでは人後に落ちないつもりである。そこでこういう素晴らしい結論の論拠となった諸事項を以下に列挙して行きたいと思う。

(1) まず鼻子音に関して。筆者流のいい方をするならば、⁽¹⁾音節始めに現われる三つの鼻子音素 m 、 n 、 η も音節末では僅かに η だけしか現われなくなってしまう。もちろんその η の異音としては $[m]$ や $[n]$ も現われるけれども。しかもその音節末で現われる唯一の鼻子音素 η ですらも、スペイン本国においても中南米諸国においても、軟口蓋化される傾向があることは周知の通りである。また軟口蓋化されなくても非常に弱まる場合もある。これら二つの場合いづれにしても落着く先はゼロになるかまたは先行母音を鼻母音化するかである。かくし

てまず／…CVC…／の場合の η の脱落が証明できたことになる。

(2) 流音について。この場合も(1)と同様に母音間では対立する η と η が音節末ではその対立関係を失ってしまう。また η と η についても同様のことがいえる。しかもその結果残った二つの音素 η と η ですら大層弱まって、両者のいづれとも判定し難い中間音となって現われたり、また本来現われるべき η をすべて η に変えてしまったり、その正反対を行ったり、またスペイン全土および中南米の一部(ベネズエラやエクワドル)においては語末の η をゼロにしてしまう地方もある。

またこれとは別の処理法もあり、*por qué* を *poiqué*、*comer* を *comei* にするといった音節末の $[\eta]$ の母音化がそれである。これまた相当流布している処理法であること(3)を証明するには *haidé* の代りの *haidé* から派生した *haidé* とか *soy* からの *soi* といった過剰訂正の例を挙げれば充分であろう。ついでにこの音節末の $[\eta]$ の他の処理法も挙げておくならば、*気音化* (*carne* \rightarrow *carhne*)、*鼻音化* (*virgen* \rightarrow *virhge*) 等があるところ(3)。

第三の処理法は $[\eta]$ のあとに *schwa* を追加することに

よって [l] を音節末から音節始めに移行する手である。たゞ *conseguir* や *vencedor* を [kose'ʝi.la] [bese'bo.la] と発音するよう。また [l] や [r] にもこれは可能で [mal.a] [ale'ma.ne] などと発音される。これらにすればメキシー・メキシコで採集された例である。

以上まとめてみると *color* のような語には二つの解決法、つまり [ko'lo] または [ko'lo.a] があることになる。⁽⁴⁾

(3) 内破の位置における有声音と無声音の対立に ついて。これに ついては *capsula*, *obtener*, *atmosfêra*, *actor* と いった例を想起すればよい。これに もやはり二つの処理法がある。その第一は *aceptar* (*acceptar*), *dotor* (*doctor*), *oservar* (*observar*), *objeto* (*objeto*), *dino* (*digno*), *protección* (*protección*) のように *ç* を *ç* としてしまう方法であり、第二は *afento* (*afecto*), *indirecta* (*indirecta*), *carácter* (*carácter*), *satisfacción* (*satisfacción*), *protección* (*protección*), *reflexionar* (*reflexionar*), *acepto* (*acepto*), *concepto* (*concepto*) と いった例に見られるような音節末子音の半母音化である。第二の方法によって半母音化すればその半母音 [ç] または [ç] は先行の開母音または強母音と結びついていわゆる二重母音を形成するから、けっきょく開

音節を形成したことになる。

(4) *s>h* の例。 *los campos* [lo'kampo^h], *conozco* [ko'no^hko], *diez pesos* [dje^hpe^hso] と いった例を挙げるまでもなく、音節末の *s* の気音化はとりもなおさず音節末子音の弱化を示す好例である。なおこの *h* は後続の [ç]、[ç] と結びついてそれぞれ [çç]、[çç] を形成することはよく知られている。[lo'pa^hle^h] *los batles*, [lo'djente^h] *los dientes*, [di'xuto^h] *disgusto* 等がその例である。

(5) 二つの語の間のリエゾンについて。母音に挟まれた一子音は必ずあとの音節に属することになっているが、これは当該子音が先行の語の末尾にある場合にもあてはまる。例えば *un hombre* は [u'homble] と発音される。そのため音節末の *s* を気音化する地方では珍妙な現象が起る。すなわち後続の語が子音で始まるか母音で始まるかによって大なる差違が生ずるのである。次の例を比較された。 *dos pesos* [do^hpe^hso] → *dos hombres* [do'somble]。意識的に俗語を用いて書かれた中南米文学の中には *Buenos Aires* と書くべきところを *Giêno Saires* と書いた表記があるという。

(6) 二重子音の忌避について。スペイン語によるラテ

ン語の二重子音の処理の仕方をまず想起されたい。ll、nn、rrを除いては二重子音は全て単一子音となってしまう。llとnnとはそれぞれ〔l〕と〔n〕とすることによって解決した。つまりそのまま単一子音とせずに、それに口蓋化を付加したのである。またrrについてはrとはその継続時間こそ異なるとはいえやはり単一子音(ふるえ音)とすることによって解決した。この解決策のさらに進んだ形が南米において聞かれる歯擦音化である。

現今でも形態論的事情によって二重子音が現われることがあるが、その処理法は在来のもものと基本的には同じである。たとえば innoble, innegable, ennegreer, los santos, es sano, del lado, con nosotros 等の例に現われる二重子音は全て単一子音として発音されている。

(7) 母音間の mb, nd の処理法について。これらはそれぞれ m・b、n・d となる。スペイン語史の中でその例を拾うと、LUMBU>lomo, PALUMBO>pelomo, El Cantar de Mio Cid には amos, cannear, cannas, lomas, entramos 等、また ND>n の例としては quano, quonano, Galino, demanar 等がある。現在では también, canniar, convenencia (<conveniencia) 等の例が俗語や方言において

見られる。

(8) hato の回避。これも昔から伝統的な現象であり、一五世紀にはたとえば reina>reina のような例が見られる。現代では bañi, país, cáñi, áñi, réñi などは réñi 等の例をすぐ思いつく。さらにこのうち áñi などは ara にまで収縮することがある。Aonde が ande となるのも同様の例である⁽⁶⁾。

以上で Malmberg の名論文の解説が終った⁽⁶⁾。さて筆者は前記の「耕文」に発表した論文の pp. 21~22 において、「中南米スペイン語の諸音声現象から一つ一般言語学上の結論を引出すことに成功したように思うのであるが、残念ながらまだ肉付けが大いに不足しているので、その発表はまた別の機会に譲ることにする。」と述べた。本論文においては一般言語学上の結論とまでは残念ながらもらいえないかも知れないが、少くともスペイン語音声学の上からみてかなり重要と思われるスペイン語の一大特徴を発見したように思う。この特徴は教室で学生に対してスペイン語の発音を指導していて偶然に気がついたものであり、また Malmberg の /CV/ 説をもその中に一部

として包含し得るようなより大きなスペイン語発話の特徴である。筆者としてはこの特徴が学生にスペイン語の発音を教授する際に教師によって念頭に置かれると非常に有用であると信じる。

I 音声どうしの連繫について。

笠井鎮夫はその著「スペイン語四週間」(大学書林刊)の p. 88 で §. 37. 「音声の連繫について」と題して概略次のように述べている。

「スペイン語においては談話の重要単位は個々の単語よりもむしろ音声群である。そして音声群とは分りやすくいえば、途中で息を切らずに一気に発音されるべき幾つかの単語の集合である。実際会話においても朗読においても、相当の速度をもって発音されるのが普通で、その場合には前の語と後の語の音とが互いに連繫し合うことがある。音声群の中の [s] 音は有声子音の直前ではかすかに有声化して [z] となり、またいわゆる巻舌の [r] 音の直前では聞こえなくなるのが普通である。これなどはその一例である。

例(1) esos dos niños (それら二人の小児) [esozdo'ci-

niŋos]

(2) eres rico (お前は金持ちだ) [e're'riko]

しかしながらそれよりも更に重要なのは「子音と母音との連繫」である。

I 前に来る語の語尾子音と、これに続く語の語頭子音とは音声群の中ではなくくつけて発音されるのが普通である。

例(1) el amo (主人) [e'lamo]

(2) Eres una muchacha (お前は一少女である)

[e're'sunamu'tʃaʃa]

II 語と語との間における「二つまたは三つの母音の結合」

すなわち、母音で終る語の次に、やはり母音で始まる語が続くときは、これらの母音は音声群の中では、途中で切らずに両者を結びつけて発音されるのが普通である。

その場合各母音はそれぞれ固有の音を保持する。

例(1) ¿Cómo está usted? [komo'e'sta'usted]

(2) No hablo a ella. [no'a'glo'la'eja]

なお、「二つまたは三つの同母音が続くときには、そ

これらの母音が結合されるのはもちろんであるが、相続く二つの同母音は「二つ半」ぐらいの長さで、相続く三つの同母音は「二つ」ぐらいの長さで、それぞれ発音されるのが普通である。

例 (1) La admiro. (私は彼女を讚美する)これがほとんど [Lað'mi:lo] のように発音される。

(2) Va a abrir. (彼は開こうとしている)これがほとんど [ba'βri:] のように発音される。」

この説明の中には筆者自身がいたいことの片鱗が出ているが、何とんでもこの書は初心者向けのものである。だから取るに足らないというのではなく、むしろ初心者向けの外国語学習書としてはこれだけのことが書いてあれば高級といってもいいだろう。ところで最近はこの種の研究が機械を縦横に駆使して共同で、しかも大規模に行われるようになった。その意味でマドリーの Consejo Superior de Investigaciones Científicas の傘下にある《Miguel de Cervantes》スペイン語学研究所に音声学実験室が設けられたことは高く評価されてよい。スペイン語音声の連続についても同実験室の長である Antonio Oñis が我々にも大変興味深い研究をいろいろと発表し

ている。その一例が一九六三年にマドリーで行われた第一回の Congreso de Instituciones Hispánicas において彼が行った La Juntura en Español: un Problema de Fología という発表である。これは後に出版された同学会の議事録 Presente y Futuro de la Lengua Española 2. 153-171 (1964) に掲載された。以下この論文に基いてスペイン語発話中で同音どうしが連続した場合にどういう現象が起るかを説明していくことにする。

A 母音の場合

二つの同種の母音が連続した場合には次のような変化が起る。

(i) 一単語の内部において二つの同種の母音が連続し、かつその二母音のいずれかが強勢を有している場合 (dehes, creel, loor 等)、九七%までは強勢のかかった長母音が現われる。

(ii) 一単語の内部において連続する二つの同種の母音が両方とも強勢を有しない場合 (accedor) は半ば強勢のかかった長母音が現われる。

(iii) 単語と単語の間で同種の強勢母音が接触する時は六三%まで強勢のかかった長母音が現われる。

例 Ya han venido [ʔa: mbe:niðo]

(iv) 単語と単語の間で同種の無強勢母音が接触する時は八九%まで無強勢の短母音が現われる。

例 A ninguna atiende. [aniŋ'guna'tjeŋde] Nunca amarga un manjar. ['nɔŋka'maŋ'jɔŋmaŋ'xaŋ]

(v) 単語と単語の間で同種の無強勢母音が接触し、しかもそのうちの一つが無強勢語(定冠詞、前置詞、接続詞等)に属する時にも無強勢の短母音が現われる。

例 para arriba y para abajo [pa'fa'riβa'pa'fa'βoxo]
pon el postre en la mesa [ponaŋ'poβt'reŋla'mesa]

(vi) 相連なる同種の二母音のうち最初のものが無強勢で、あとのものが強勢を有する時は強勢を有する長母音が現われる。(その確率は六五%)

例 donde entra el sol [doŋde: aŋ'la:saŋ], lo hondo del mar ['lo: ŋdoŋ'eŋ'maŋ]

(vii) 相連なる同種の二母音のうち最初のものに強勢がかかり、あとのものが無強勢だと強勢のかかった短母音が現われ、その確率は七〇%である。

例 Ya sé el tema ['fa:seŋ'tema]
La niña está alegre ['la:niɲa:seŋ'tu'leŋ'e]

(viii) 動詞 se、特にその直説法現在三人称単数形 se は特に別記することにする。se が強勢をもって現われるパーセンテージは九四%、強勢がかからない場合は僅か六%である。

相異なる無強勢の二母音は、無強勢特有の弛緩現象のためにやや不明確になるとはいえ一応各自それぞれの音色を保ちながら一音節を形成する。

もし一方の母音が強勢を有するような場合でも、文法上その他の特別な理由がない限りやはり一音節を形成する。その場合一方の母音の強勢はその音節全体にひろがる。

B 子音の場合

(i) [s] が二つ連なると一つの [s] になる。

例 las sombras [la:somb'ras], las salas [la:salas]

(ii) [n] が二つ連なると一つの [n] になるが、またはたまたまやや長目の [n] になる。

例 Un nombre ['u:n'bɔm'ble] または ['u:n:ɔm'ble], En nada se parece a ti ['e:nada se'ta:ti e'nada se'ta:ti a:da:sepa:le'ðe:áti]

(iii) 語末の [f] または [r] と語頭の [r] とが接触すると一つの [r] になる。

例 Humor racional [u'lmtraðjo'nal] Cantar regional [kaŋ'tarexjo'nal]

(iv) (1)が二つ連なると一つの(1)になるか、またはたまたまやや長目の(1)になる。

例 El loro [e'lolo] または [e'l:olo]

El lado [e'lado] または [e'l:ado]

(v) (s), (n), (1)の場合スペイン語では決して二重子音を形成しない。(r)についても同様である。

以上をまとめると以下の如くである。

1) スペイン語では音の長さが重要な役割を演ずるのは次のような場合である。

a) 両者の対立が母音の長さ如何にかかっている場合。

- | | | |
|---|---------------------------------------|-----|
| { | Villanita [biʒa'nita] | |
| { | Villa Anita [biʒa:'nita] | (s) |
| { | Una rubia dorada [una'ruβjaðo'laða] | |
| { | Una rubia adorada [una'ruβja:ðo'laða] | (s) |
| { | ¿Qué techo? [ˈketeʃo]..... | (a) |
| { | ¿Qué te echo? [ˈkete:ʃo]..... | (b) |
| { | ¿Qué te he hecho? [ˈkete::ʃo]..... | (c) |

最後の例でいま問題になっている部分をかりに百分の八・八秒として被験者に聞かせたところ彼等の大部分が(a)と答えた。しかしこれを百分の十六秒としたところ混同が起こり(b)とした人と(c)とした人とに分れたが、(a)とした人はなかった。さらに百分の二八・八秒にしたら皆(c)と答えたという。この一実験からも母音の長さの違いがいかに重要であるかが分る。

b) 両者の対立が子音(主として(n)と(1))の長さ如何にかかっている場合。

- | | | |
|---|--------------------------------|-----|
| { | El lado bueno [e'l:ado'βweno] | |
| { | El hado bueno [e'lado'βweno] | (s) |
| { | Un hombre [u'nɔmble] | |
| { | Un nombre [u'n:ɔmble] | (s) |
| { | El oro [e'lolo] | |
| { | El loro [e'l:olo] | (s) |
| { | 2) 両者の対立が強勢の有無にかかっている場合。 | |
| { | Nos sirven [no'siβen] | |
| { | No sirven [no'siβen] | (s) |
| { | Nos son útiles [no'sol'utiles] | |
| { | No son útiles [no'sol'utiles] | (s) |

以上が Otilis の論文の概要であるが、最後に彼は断り書をしている。すなわち以上の実験結果は日常の会話では通用し難い。つまりそれは例文がすべて実際の会話では極く稀にしか現われぬものばかりだからである。と同時にこれら音の長さによってのみ最小対立をなす発話どうしがたとえ実際の会話では区別できなくても、コンテキストという貴重な手掛りがまだ我々には残されているはずだと彼は結んでいる。

けっきょくこの章で筆者がいたかったことはスペイン語発話内に現われる音声というものは常に隣接の音声とリエゾンする可能性を秘めているということである。これはフランス語の同種のリエゾンの規則などよりずっと徹底したものである。その証拠にスペイン語には発話の流麗さをそこなう有音のhなどという不都合なものはない。発話が速く行われれば行われるほどリエゾンの頻度も高まるはずである。ただしさきほど筆者は「リエゾンする可能性を秘めている」とややカテゴリカルでない表現を用いた理由も充分勘案されねばならない。つまり遅い発話であればあるほど呼気段落の数が増加する。その際呼気段落が置かれた部分にはリエゾンが起きる可

能性があったとしても起きないということである。例を W. Weinbauer の Spanische Umgangssprache の西訳によって説明しよう。同書の六七ページには ¡A prieta! que mañana es día de fiesta. という文章があるが、この文章がゆっくり発音されると恐らくは mañana es で一応呼気段落が切れるはずである。すると速い発話では必ず現われるはずの [z] の音が無声音のまま現われて来ることになる。これはいかにリエゾンの得意なスペイン語といえども致し方ない現象である。反対に同書の六六ページにある例文 ¡Ay! Parece que llevo caminando un año entero. にあつてはいかにゆっくりした発話であろうと un año entero の部分を [ʔn ʔaño en ʔelo] と発音したのでは絶対にスペイン語にはならない。上の発音はスペイン語を習いたての学生によく聞かれるものである。このフリーズはどんなに遅く発音されようとも、[ˈmaɲanoes ʔelo] と発音されねばならない。[u] が開いた異音から閉じた異音に変化し、また año の末尾の [o] が半母音化していることにどうか注目していただきたいものだ。

II 開母音または強母音どうしの衝突 (hiato) の回避

初歩スペイン語学習者の発音の中で特に気になる現象の一つとして hiato の強調がある。たとえば *empleado*, *pais* 等における二つの開母音(または強母音)の間にスペイン語が最も嫌うはっきりとした切れ目、ないしは極端な場合には〔〕音を入れてしまう傾向がそれである。それだけならまだ許せるとしても、もともと hiato など存在しない *majestu/oso*, *bi/ombo*, *qui/oso* といった語にまでこの悪癖を込め込むのである。さらにひどく学生になると *majestuoso* の二番目の〔〕を二重にして *[maxestu-
-osso]* と発音する。もはやこれはスペイン語とはいえない。日本語の癖をそのまま導入して発音された醜悪なスペイン語である。まさに Mainberg の論文紹介の部分にもあったようにスペイン語、特にその俗語はこういう際の hiato を回避する傾向が強い。Navarro の *Manual de Pronunciación Española* の p. 161 以降から拾っただけ *láud*, *bául*, *páis*, *máiz*, *vizcáino*, *bilbáino*; *áhora*, *áhi*, *áun*; *tiá,díá*, *habíá*, *hacíá*; *fuído*, *período*, *etiópe*,

cardíaco, *oceáno*, *alveóio* を見つけるところができた。また Zamora の *Dialectología Española* 44 の p.307 以下で中南米のスペイン語を取扱っているが、そこから *cáido*, *máistro*, *cáir* 等を見つけ加えることができた。さらに J. D. Bowen の *Sequences of Vowels in Spanish* BOLETIN DE FILOGIA DE LA UNIVERSIDAD DE CHILE 9.5-14 (1956-57) はこの問題のみを取扱った論文であると、とてもいくらいである。その中から前二者とはちがった性質の例を拾ってみると、*beatitud* > *biatitud*, *maestría* > *mestría*, *leonés* > *lionés*, *poetisa* > *puetisa*, *abortia* > *orita*, *toallita* > *tuaillita* 等を挙げることができ、⁽⁵⁾ とにかくいざれにしてもスペイン語には hiato によって生ずるあのゴツゴツした感じを何とかして取除こうとする本来的傾向が内在していると考えることができる。従って *hajes-tuoso* のごとく、本来 hiato を有しない語を恰も hiato を有するように発音するなど、まさに言語道断といわねばならない。

III 二重子音の回避

前章でもちょっと触れた通り、日本人学生の中には

majestu/osso, hermoso, esse 等と単一の[s]を二重子音化してわざわざ喉頭の緊張とか〔音などスペイン語には不必要なもの〕というよりもスペイン語の最も嫌うもの)を持込んでしまう人がすこぶる多い。これは筆者が思うに、日本語という彼等の母国語の構造上この位置をダブル[s]にした方が発音し易いということなのだろうが、外国語の発音習得のためにはまず母国語の発音上の習癖で、同外国語の発音習得に当って障碍となるものを破棄せねばならぬことというまでもない。特にスペイン語はその音節構造や母音体系が日本語に酷似しているため、その発音に関しては英語・フランス語に比して習得が容易であるとの印象を与えやすいが、そこに大きな落とし穴があることを忘れてはならない。一般の日本人でもスペイン人が目を見張るほどスペイン語の発音に上達することがあるが、最後のところで結局は外国人の発音であることとを暴露してしまう例が多いのは、ひとえに前述の油断および音声学に関する適度の知識の欠如によるものであると信ずる。

スペイン語がいかにかに二重子音を嫌うかはスペイン語史を一読すれば、ラテン語に類繁であった二重子音をすべ

て単子音に変えて保存してゐることを知ることによつて明らかとなる。さう R. Menéndez Pidal の名著 *Manual de Gramática Histórica Española* から該当部分 (pp. 134-135) を抜粋してみると次の如くである。

45. 二重破裂音は単一化しそのままそれ以上変化することはない。〔唇音〕 PUPPIE > popa, CAPPA > capa, CIP-PU > cepto, STUPPA > estopa, ABBATE > abad. 〔齒音〕 SAGITTA > saeta, GUTTA > gota, MITTERE > meter, CAT-TU > gato, *IN-ADDIT > enade > añade 〔軟口蓋音〕 BUC-CA > boca, PECCATU > pecado, SIOCU > seco, VACCA > vaca 〔ちり単一化は母音間無声子音の有声化よりも後に起こったのである。〕

46. 二重鼻子音や摩擦音も単一化するが、時に少し変化することがある。

イ・田は不変。FLAMMA > llama, GENNA > yema, *AS-SUMMARE > asomar. ʒ の同様。SESSU > sieso, GROSSU > gtuesso, MASSA > masa, PASSU > paso, CRASSU > gra-so

ロ・RR は r の音化した。CARRU > carro, FERRU > hierro, TURRE > torre, TERRA > tierra

(61) スペイン語発話の音声学的一大特徴について

ン・LLとNNは口蓋化した。VALLE>valle, CABALLU>caballo, BELLU>bello, PULLU>pollo, MEDULLA>meollo, CANNNA>caña, GRUNNIRE>gruñir, PANNNU>pañño.

この解決法が現代のスペイン語にもあてはまることはさきに紹介した Malmberg の論文中に彼が挙げている *innoble* その他の例で明らかである。筆者が手許に持っている材料から少し例を出すならば、筆者が滞西中にスペインがヨーロッパに誇る最強のプロ・サッカー・チーム *El Real Madrid* の中衛をとめていたのはフランスとドイツの国境ストラスブール出身の Müller という選手であった。スペイン人は彼のことを「*Muyel*」などとはもちろん呼ばず、単に「*mulel*」と発音していた。また現在の世界フライ級チャンピオン Horacio Acavallio のことをアルゼンチンでは彼がイタリア系であることを考慮してであろう、誰も [akka'fasko] とは発音しない。[aka'falo] が普通の発音である。[k] が二重子音でないことと特に注目する必要があると思う。

さてさきほどは日本人学生がスペイン語の発音を学際の際の悪癖として [s] を二重子音化する傾向を挙げたが、こ

の傾向は [x] についても著しい。これは恐らく [x] が軟口蓋音であるためにその調音点に近い喉頭をつい緊張させてしまうために起こるのだろうと思う。事実音素 /ʎ/ に対して大変敏感な我々日本人はついスペイン人の [x] 音の前には /ʎ/ を聞きがちである。初級のスペイン語教科書などではよく *jo* や *bafo* といった語に片仮名をふって、「オッホ」「バッフホ」としてあるが、いままで述べて来たような理由によって筆者は賛成し難い。文豪 Pio Baroja の「ビーオ・バローハ」と表記すべきである。

ついでにスペイン語が声門閉鎖音を [ʔ] を嫌うことについても触れておこう。その昔スペイン語は相当数の名詞をアラビア語から輸入した。にも拘らずそれらの輸入名詞には声門閉鎖音の跡形すらない。この傾向はもちろん現代スペイン語にも通用する。ドイツ語が *dieses alte Biöche* や *Erinnerung* を [ˈdi: za ˈʔalɔ ˈʔaɪçə] や [ˈʔer ˈʔɪnərʊn] とそれぞれ発音(この例は服部四郎著「音声学」の p. 27. より借用)するのに対し、スペイン語では Malmberg の *Etude sur la Phonétique de l'Espagnol* *Parlé en Argentine* p. 107 の *Cuervo* の *Apuntaciones Críticas sobre el Lenguaje Bogotano* の p. 570 を *ʔuɛrβu*! *Ay, ay,*

av- が何と [afja 'faj] と発音されることすらあるという。言語によってこんなにまで違うものと驚かざるを得ない。

IV スペイン語には内部開放接続がない

この問題についてはあまり多くをここで語る必要はない。なぜならば前述の Ojits の論文があるし、また筆者にも「スペイン語音素論(その八)——スペイン語に内部開放接続は存在するか?」東京外国語大学論集 15:101-130 (1967) があるからである。Ojits のものも筆者のものも結論は同じ、つまり「スペイン語には内部開放接続は存在しない。」ということになった。要するに una parte ['una'parte] から un aparte を区別するための不自然な [un a'parte] という発音は存在しない。また仮りにそのような発音が存在するとしたら、それはスペイン語の発話が本来有している流麗な流れを著しく阻害することに役立つであろうというのが我々のこの章における結論である。

V 音節末の子音の弛緩

これについてもさきに紹介した Malmberg の論文に詳しく述べられていることでもあり、あまり多言を要さないと思う。筆者が滞西中に集めた、語末子音に関する例ばかりをここでは出しておこう。coniac [ko'ɲa], Palop (入の音字) [pa'lo], carnet [ka'ɲe], club ['kluβ], verdad [be'ɾiða または be'ɾað], reloj [re'loj], Varig (トラシムの航空会社の名) [ba'ɾiŋ]

以上の例からも分る通り、語末子音は著しく弱化するか、消滅するかしてしまっている。これが音節末子音となるともう少し消滅の度合が小だろうが、大差はない。とにかくその位置に何らかの音が残るにしてもそれは摩擦音か流音、破裂音は絶対に残らないことが明らかとなった。さらにいうならば摩擦音とゼロとの間には大した距離はないし、また流音も常に母音化または摩擦音化する可能性を秘めているのである。この事実一つを見てもスペイン語の音節構造が CVC から CV へと移行しつつある状態がよく分る。ところで CVC という音節構造の連なりと CV という音節構造の連なりとは、発音の上からいっても聞いた感じからいっても、いずれがよりなめらかに聞えるであろうか。問題なく後者の方がなめら

かである。

VI 有声摩擦異音 [β], [θ], [ɣ] の存在

スペイン語では [b] 音は ポーズ のあとと [m] のあとのみ、
[d] 音は 同じく ポーズ のあとと [n] および [l] のあとのみ、
[g] 音は ポーズ のあとと [ŋ] 音のあとのみにそれぞれ現われる。
従って /b/, /d/, /g/ に関して統計的にいえばそれぞれの
摩擦異音の方が破裂異音よりもずっと出現頻度が高い。
これらがスペイン語発話からドイツ語などのゴツゴツした感じを取除くことに貢献していることを否定する人はよもやあるまい。

VII 強勢を持たない語の存在

これは筆者がこのあとで引出す結論にはあまり関係のない事項かも知れない。しかし全く関係がないともいい切れない。しかもいままで日本で出版されている日本人学習者のためのスペイン語入門書ではこの点が全く不当に無視されて来た。最近出版された岡田辰雄の「生きたスペイン語会話」の「チャ」以下でやっとこの事項が強調されている程度である。しかしこの事実だけでも我々は

率直に喜ばねばならない現状である。

スペイン語は特にその所有形容詞の短縮形や斜格代名詞や定冠詞や関係詞や前置詞・接統詞において多数の弱勢形を有している。この事実が学習書で強調されないし、また教師もこれについて口うるさくいわないためであるう、学生の発音には *sus* *libros*, *los* *libros* といった実に聞きにくいものがある。ひどいものになると *sus*, *los* に顕著な強勢をかけておいてそのあとにポーズを置いて一服する仕末である。筆者にいわせればこういった前掲のような弱勢形のおかげでスペイン語の文章はなだらかに、リズムに読めるし、聞こえるのであると思う。このことは、反対にこれらの弱勢語が全部強勢語であれば……と仮定してみればすぐ理解できることである。ついでにいわせてもらうならば、ある種の参考書には *scher* の *se* に強勢符号が打たれるのは代名詞の *se* と区別するためであるなど書いてあるが、これまたとんでもない誤りである。結果的にはそうなるかも知れないが、もとはといえばこの強勢符号は「文中で *se* が現われたら、強勢をかけて読め、*se* が出て来たら強勢をかけるな。」という規則のために存在しているのである。他の同種の語につ

いても同様のことがいえる。

どうやらここまで書いて来てそろそろ結論を出す段階になったようである。

〔結論〕 スペイン語の発音は他のいかなる欧米の言語のそれにもまして、常に音楽の方で用いるレガート（イタリア語の *legato*、スペイン語では *ligado* に相当しようか）によってなされねばならない。

この結論はいかにも平凡で、今更大発見であるかのようには騒ぎ立てる必要もないと思われるかも知れない。しかし筆者はこのことを今まで述べて来たように実に深い意味で、しかも専門的な音声学の見地から主張したのである。しかもスペイン語の教師はこの結論を念頭に入れて学生の発音指導に当ると非常によい結果を生むと筆者は確信している。

このスペイン語発話の一大特徴について筆者のように深い意味でなく、むしろ一面的（主として内部開放接続がスペイン語に存在しないということだけから）に言及している人が二人ばかりあるので彼等の所説を紹介しておく。

1) は Politzer & Staubach 共著の *Teaching Spanish*

A Linguistic Orientation の p. 61 である。彼等はこう、

「このプラス接続の正確な音声的定義はむずかしいが、英語の話し手がこれを語の境い目を示すのに用いるという事実のために、彼にはスペイン語の話し手はスペイン語の単語をすべて一緒にくっつけてすべらせているように聞える。」

もう一つはさきに出した Quilis の論文の p. 167 である。

「スペイン語には内部開放接続は存在しないという結論になった。我々の言語はたとえば英語やドイツ語といった内部開放接続の存在が証明されている言語とは異なつた一特性を有している。この特性とは、無声破裂音の気音化、有声子音の無声化、母音を強く叩きつけるように発音する等語の境い目を示すような音声特徴をもつ前記両言語とは異なり、呼吸段落内の全音素をすべてくっつけて発音する顕著な流麗さのことである。このことを最もよく物語る事実、外国人学生にスペイン語の書き取りをさせた場合、意味不明の語群にぶつかると語間の正しい切れ目が分らず、誤まった分け方をするということ

である。」

以上二つの説、筆者の結論と同一のように見えるが、やはりその論拠が一面的である。しかし Quilis は筆者が引用した部分の末尾において大変よいことをいっている。スペイン語を母国語とする人々の発音がまるで我々には聞取れないように速いのもひとえにこのスペイン語発話の一大特徴のおかげで可能なのであり、また反面ではどこに単語の切れ目があるのか分らずに誤解を招くのも正にそのために他ならぬ。

最後に一つ但し書をつけねばならない。それは中南米各地に現われ始めた、以上とは全然正反対の傾向のことである。つまりこれらの地方では子音+母音という構造の音節においてむしろ母音の方が脱落してしまうのである。これは極端な場合には強勢のかかった母音にも起こる。たとえば *no se cuida, va sin mirar, vista, francés, chiste, cinco* などがその例である。これだけで見る限り *s* と接触した場合に起こる例が圧倒的に多い。この現象は割合に早くから気づかれていて、早い所では A. M. Espinosa: *Estudios sobre el Español de Nuevo México* (1909),

- A. Alonso: *Problemas de Dialectología Hispanoamericana*
— Biblioteca de Dialectología Hispánica I の pp. 431—
439 (1930) がある。その後 P. H. Ureña: *Observaciones sobre el Español de América RFE* 8, 358, n. (1938), J. Matluck: *La Pronunciación del Español en el Valle de México NRFH* 6, 109-120 (1952), P. Boyd-Bowman: *La Pérdida de Vocales Atonas en la Altiplanicie Mexicana NRFH* 6, 138-140 (1952), M. J. Canellada & A. Zamora Vicente: *Vocales Caducas en el Español Mexicano NRFH* 14, 221—241 (1960), J. M. Lope Blanch: *Estado Actual del Español en México PRESENTE Y FUTURO DE LA LENGUA ESPAÑOLA* 1, 79-91 (1964) 等の諸論文がこの現象が扱われている。欧米両大陸にまたがって広範囲に話されているスペイン語のことゆえ、一概にスペイン語の音節構造の形は将来これこれになるだろうといった発言が危険であることは言うまでもない。政界や学界の手による懸念なスペイン語統一化運動にも拘らず、スペイン語方言の色々な変種はますますその数を増して行くことだろう。しかしそれはさておき、教授法上の問題となるとやはりかかる異様な方言には目もくれずに *castellano* を

教えるしか我々にはない。その意味でやはり本稿で引出された結論には存在理由があると認めざるを得ないのである。

(1) つまり Malmberg 流のいい方をすればこの場合に「中和」という用語を使わねばならない。筆者は東京外国語大学論集 13, 37-76 (1966) に発表した「中和批判」において、「中和」の適用範囲を極度に制限した方がいいという結論を出したので、ここでも原論文の表現をそのまま踏襲せずに、筆者流の表現に変えてみたのである。

(2) こういう現象を見ていると、音素間の対立関係の種類が音節末では減りはするものの、その位置に現われるべき音自体が消え去ってしまうわけではないという反論が起こるかも知れない。しかし音節末という位置で音素間の対立関係の種類が減ること自体が、同位置における諸音素の取扱いが疎略になっていることを示すものであり、やはり /...CVCV.../ の傾向を物語っているものということが出来るのである。今我々が問題にしているのはそういう事実自体ではなく、そういう事実へと向わんとする傾向である。

(3) Malmberg はこのあとで後続の子音との同化が起こる *pr' verde* > *vedde*, *carga* > *cagga*, *alma* > *amma*, *irse* > *isse* のような二重子音が生ずると述べているが、この現象は彼の論文の結論にとっては全く都合の悪いものである。

彼はこれをどう説明するのであるうか？

(4) Malmberg はこのあと「音節末のはじき音の [r] をふるえ音の [r] で発音する地方としてメキシコやニュー・メキシコがある。」と述べているが、これまた彼の引出す結論にとっては不都合な現象であるといわざるを得ない。筆者もこの現象をよくマドリドで聴いた記憶がある。

(5) Malmberg はここにさらに昔の *-ades*, *-edes* から派生した文語形 *-ais*, *-eis* と方言形 *-as*, *-as* との現代における併存を加えている。しかしこれら *voseo* で用いられる *-as*, *-es* という形は *-ais*, *-eis* からのみ派生したものというふうには説明されていない。普通は二人称単数形 (その一般形は *CVCas* とでも表わせようか) と二人称複数形 (*CV-Cais*) とを加えて二で割ったものとして説明されている。従ってここに出す例としては不適当である。

(6) J. H. Matluck: *Fonemas Finales en el Consonantismo Puertorriqueño NUEVA REVISTA DE FILOLOGIA HISPANICA* 15, 332-342 (1961) を見ると Malmberg の大発見を証明する興味ある実例が出づる。英語の教師としてホルト・リーコに赴任した Matluck はある時生徒に宿題を課した。すると次回の授業の時ある生徒が彼のそばに近づいて来て次のようにいった。さすがの Matluck も彼のこの英語は一度いわれただけでは何のことだからいはいり分らなかったと。すなわち
[mihrel'ajōō'hađit'itueh' tođi'shrel'ae so'ajy'i'juđihō-waj'dinehtaj]

と彼は言った。じまり Mister, I don't (didn't) の誤まり
でま(さう) have the time to study yesterday, so I give
you the homework the next time. の意味である。こ
の母国語の特徴丸出しの英語の中にはスペイン語の潜在的
傾向が実によく出ている。数少い閉音節を形成している
音節末子音は僅かに [l] と [h] のみである。前者は [f] との対立
がないからいずれば消え去るか、半母音化する運命にある
とみてよいであろう。また後者もいまますぐ消え去っても一
向に支障を来たさないうような弱い音である。このように外
国語を考えなしに発音した時について母国語の重要な癖が出
ることに我々は注目すべきである。中でもスペイン語は特
に外来語をあらゆる意味でスペイン語的構造に変える点で
傑出していると思う。英語からスペイン語に入った語の構
造を研究したものに R. J. Alfaro: El Anglicismo en
el Español Contemporáneo & E. Lorenzo: El Angli-
cismo en la España de Hoy などがある。

(7) の例の Villa はあひび米の強勢に惹かれ

てそれ自身の強勢を失う。

(8) この例は原作者 Antonio Quilis が挙げていたので敬
意を表して筆者もここに転記したが、実際は不適当だし、
また不必要であると思う。

(9) またスペイン語で「針と糸」とか「七または八」とい
う時、aguja y hilo とは siete o ocho と「わずに」 [a-
'ɣaxaé:'hilo], ['siete'bo'fjo] とうまく解決してしまう習慣
もこの中に含めていいと思う。

(10) たとえばフランス語には有音の h があるし、英語には
時々 [ʰ] 音が現われるし、子音の連続が豊富である。CV
といった音節構造の連なりよりは CV という音節構造の連
なりの方が流麗に聞えることは火を見るより明らかであ
る。ドイツ語のゴツゴツした感じは論外である。イタリア
語はややスペイン語と似た感じを与えるが、それでも二重
子音が豊富である。

(一橋大学講師・東京外国語大学助教)